

我が國古代の道德と儒教(一)

高橋 俊 乘

第一章 儒教傳來とその影響

古傳によれば應神天皇の十六年に王仁が論語を獻じたのが、儒教傳來の始とされてゐる。その時、我が國には特に眼立つた變亂がなかつた。その後二百六十餘年(これは書紀の紀年である。正しくは百七八十年程であらう)佛敎が欽明天皇の十三年に傳つた時には、蘇我物部兩氏の争が起つて戰亂をさへ醸した。この著しい差の起る原因を説くのに、我が國固有の古代のジツテと儒敎の敎へる道德とは、實踐上大差がない。尤も、禪讓放伐を是認する支那思想の君臣關係と、天壤無窮の皇統を戴く我が邦の君臣關係の大差あることは言ふまでもないから、この事は姑く除いて他の父子、夫婦などの關係について、正直とか禮讓とか勇氣などの道德について言ふのである。かく我が古代の道德的風習と儒敎の道德とは大差はないが、佛敎は出世間的の敎で死後未來の生活の安樂を求めしめるものであるから、佛敎渡來以前の我が古代

人の道德思想や宗教思想とを比べて見ると、殆ど未來の事を考へず、現世の生活を樂しんで、別段に厭ふべきものと思つてゐなかつた我が古代人の道德や宗教と佛教とには大差がある。従つて佛教渡來の時に人心が動搖して戰亂が起つたのも、ありうることであると、説く人が多い。日本道德史の通説のやうである。

しかし私は別の考を持つてゐる。

元來儒教も佛教もそれ〴〵支那と印度の風習を本として組織立てられたものであるから、それと風習を同じうしない我が古代の道德が儒佛いづれとも類似するはずがない。その中支那の方が印度に比して地理的にも人種上にも、日本へ對して近いから、風習も支那の方が印度よりも日本に類縁の度が多い。従つて儒教の方が佛教よりも、日本固有の道德思想や宗教思想に近いであらう。しかしそれは印度より近いといふだけであつて、大差がないとは言はれない。もし大差のない事を主張しようとするならば、綿密な證明によつて、この差を減少するやうに試みる義務がある。差の大きかるべき筈であるのが、根本的、一般的であつて、差が少いとすれば、何か特殊な事情がなければならぬからである。

又蘇我物部兩氏の争は佛教と舊思想並びに舊信仰との争を一の動機として起つ

てゐるが、争亂の眞の原因は信仰の衝突にあるのではない。もし佛教と舊信仰並びに舊思想との衝突が眞の原因であるとすれば、まだ佛教が勢力を得ること少く、舊信仰舊思想がまだ勢力の大なる時であつたに拘はらず、舊信仰方の物部氏が敗れた時何故に第二第三の物部氏が現れて佛教方に對抗し、物部氏の弔ひ合戦をしなかつたか。二氏争の眞の原因は二氏の勢力争にあつたからこそ、一方が斃れたら、それつきり争亂が止んだのである。後世、戰國時代の末に天主教が傳へられた時、佛教と天主教とは大差があるに拘らず、二教の間に眼立つた争亂を起すやうなとはなかつた。戰國時代で法華一揆や一向一揆のあつた時であるから、佛教、天主教の間に争亂を起す覺悟があるなら、戰亂が起つても不思議ではない時であつたが、島原の亂の如き、爲政者に對する戰亂はあつても、佛耶兩教間の戰亂は起らなかつた。當時は本地垂迹説によつて神道を佛教にとり入れて、萬事を佛教で説明する時代であり、天主教の牧師が、佛教の中へ一新宗教を宣布する都合上、佛教臭い言葉を用ひ、佛僧まがひの服装をしたこと、ことに天主教を傳へたポルトガル人が印度のゴアを根據として東洋各地に布教し貿易した爲、當時の日本人に天主教をも佛教の一派であるかの如く思はしめ、意識的にも無意識的にも、佛教とは全く別異の一新宗教であると思はしめな

かつたといふ事(1)が、佛耶兩教間の争を起さなかつた一原因とも考へられるが、しかし叡山と三井寺と戦つたり、天台宗と法華宗とが血を流したこともあるから、天主教が佛教の一新派であると言せられたから、兩教間に争が起らなかつたのであるとも言へなからう。つまり信仰の別異といふことが、日本人にとつて大した刺戟を起さず、喧嘩の種にもならなかつたので、權勢の争奪と結びつく時だけ、爲政者の政策と相反する時のみに宗教一揆が起つたのであらう。蘇我物部の戦も、恐らくさう解すべきもので、信仰上の戦争ではあるまい。蘇我物部二氏が、兩雄並び立たず、いつか争が起らねばならないやうな機運になつてゐた時に百濟聖明王が佛像經文を獻じたので、火の將に燃えんとしてゐる所へ油を注ぐ如く争が破裂したのである。佛教の渡來がなくとも、早晚二氏の争が起るやうになつてゐたのである。尙二氏の争亂の經過は、始こそ佛を祭るべきか否かの異議から起つてゐるが、後には皇位繼承の亂に變じてゐるし、かつ、代々神事を掌り、奈良平安時代にも尙さうであつた中臣氏は當然、物部氏を援け、物部氏と運命と共にすべきに拘らず、始は物部黨であつたが、後には變心した爲、中臣勝海は殺されてゐる。つまり、二氏の戦で信仰上の争もいくらか原因となつてゐるだらうが、主なる原因は勢力争にすぎぬ。

○

儒教の傳へられた時に、今日残つてゐる傳説中には、かゝる争亂がない。しかし一の悲劇が演せられてゐる。傳説によれば應神天皇は諸皇子の中で、菟道稚郎子皇子を太子とせられた。菟道稚郎子は始は阿直岐や王仁を師として學ばれ、書紀には「通達せざるなし」と評してゐる位であり、後に高麗王の表文に「高麗王教日本國王也」とあつたのを見て、太子は使を責め、表文を破られたと傳へられる。應神天皇はその敏慧なのを愛せられ、かつ、太子は諸皇子中の末子であらせられるが、末子である故に却てこれを愛して太子に立てられたと普通解せられてゐる。だから御兄の諸皇子が承て、みましたちは、兄なる子と弟なる子と孰れか愛しき。」と問を試みられたことさへある。然るに應神天皇が崩御の後、菟道稚郎子は御兄大鷦鷯尊に譲つて三年まで即位されなかつたが、遂に意を決し自害して、皇位を御兄に譲られたといふ話である。菟道稚郎子が何故に死んでまでも位を御兄に譲らねばならなかつたか。第一の答は、太子は漢學に通達せられた方である。儒教の感化を受けて、長幼の序を深く守り、遂に死を以て皇位を譲られたのであらうといふ説である。太子が弟の身として天

位に即くことを正しくないと思はれたことは、或は事實であらう。さうしてそれは儒教の感化、殊に伯夷・叔齊などの故事が特に太子の御胸に強く響いたかも知れない。しかし第二子以下の相續、殊に末子相續は我が古代史に於て非常に多い。神代では彦火々出見尊が兄君の火闌降命に勝つて皇統をついでをられる。神武天皇も皇兄三方を越えて太子となられ、綏靖天皇も第三子の御身であり、開化垂仁・景行・成務・應神等歴代多くは皇兄に越えて天位につかれた。これらの傳説が一々事實ではなからうが、かういふ傳説が語られる爲には、當時かゝる傳説の作られた時及びそれ以前に長子よりもそれ以下の弟の方が多く相續した風習があつたに違ひない。尤も多くの童話に於て見られる、兄弟が争ふ時は大てい弟が勝つといふ傾向が、これらの傳説にも用ひられてゐるだらう。殊に彦火々出見尊の場合は確にさう思はれる。併しそれと共に古代一夫多妻の行はれた時、或家長が年老いて子に相續させようと考へる頃に、最も愛を得てゐる妻の子が相續しやすく、さうして、その頃最も愛を得てゐるのは大てい最も後に妻となつたものであり、その生んだ子は先づ幼弟、末子であることが多いといふ風習上の事實が、我が古代史の王位繼承に現はれた事が多からうと思ふ。だから菟道稚郎子皇子が相續されるのは當時の風習として不思議はない

のであるが、皇子自ら當時の風習に反して正しくないと考へられたとすれば、かく考へ給ふぐらゐ強い心理變化を起す刺戟があつたと見なければならぬ。それが右の第一の答である。しかし當時果して儒教がそれほど影響を興へたであらうか。私は伴信友以後一部學者の説に従うて否定したいと思ふ。(2)

私の否定する理由を述べるに當つて先づ太子の御學問について考へる。その中、太子が高麗の表文を責められたといふ傳説は全く架空の話である。何となれば國史と朝鮮史とを比較するにあたり、朝鮮史も古い所の年代はあてにならぬが高麗(高句麗)が魏や燕と戦つたり、百濟高句麗と戦端を開くやうになつた頃の年代は、支那史と比較して定めうるから疑がない。百濟が高句麗と始めて交渉を生じたのは高麗の故國原王が百濟の近肖古王と戦つて敗れた時(西紀三六九)に始る。而して神功皇后の新羅征伐頃の書紀の紀年はあてにならぬが、新羅奈勿王、百濟近肖古王の時であつたことは疑ふ餘地がないやうで、續紀卷四十津真道の上奏中に「及近肖古王、遙慕聖化、始聘貴國、是則神功皇后攝政之年也」とあるのが最も明證である。古事記應神天皇の條に照古王の名が出てゐるのも一證である。王仁の來朝が照古王の子、近仇首王の事であるのは右、真道の上奏、並びに同書同卷、文最弟等の上奏中にその證左が見え

る。然るにこの頃高句麗は、百濟と休戰状態で全く交渉が無かつた。従つて高句麗と我が國との交渉も起らない。故國原王より二代を経た好太王(三九一—四二二)は英明の君であつて散々に百濟を破つた。日本が百濟を助けなかつたら百濟が亡ぶほゞだつた。高句麗が日本に使を送つたのは、百濟を攻めて破つた後、日本の勢力に遠慮して、その銳鋒を收めた後でなければならぬ。好太王の頃は我が仁德・履仲兩朝にあつてゐることまづ疑がないから、高句麗の使は早くとも仁德天皇の末年に來たのであつて、その即位前即ち應神天皇の御代に來る筈がない。故に菟道稚郎子皇子の高句麗の使を責められた傳説は全く虚傳である。恐らく太子が王仁について學ばれたといふ傳説を證據立てようとする企から生れた説話であらう。

稚郎子の御學殖を推定する材料はないが、さほゞ深いものではなかつたらうと思ふ。阿直岐が來朝した時、應神天皇は菟道稚郎子をして之に就いて學ばしめ、かつ阿直岐の本國たる百濟に命じ、「もし賢人あらば貢れ。」と仰せられて、王仁が來たのであるから、天皇もいくらか漢籍に親しんで居られたに違ひない。さう考へうるならば、その御母神功皇后が新羅を征伐された時種々の外交事務を處辨するため、朝官の中には漢學に馴れたものもあつたらうと、推想する事も無理ではあるまい。更に應神

天皇が獨り稚郎子にのみ學習させられて、何故に他の諸皇子を除外されるやうな事があらう。必ず大鷦鷯尊その他の皇子も學ばれたのではなからうか。殊に從來都は多く大和にあつたのに、大鷦鷯尊は三韓との交通の要地たる難波に都を建てられた程の方であるから、必ず多少なりとも漢藉によつて新文化にも觸れられたであらう。かく考へると、書紀や古事記に阿直岐や王仁と稚郎子の關係のみを記し、太子の御聰明を特筆してゐるのは、或何かの目的を以て作られた傳説ではないかと疑へる。抑も阿直岐王仁の來朝傳説は種々の疑問がある。その詳細はあまり横道へはいるから他日の事に譲りたいが、例へば西文氏の祖たる王仁の名が津真道の表文中には船氏の祖辰孫王と變つてゐるし、王仁の貢つた千字文はその頃まだ支那で作られてないものであつたりして、全體が怪しむべき點が少くない。されば應神天皇ごろに韓土の文化や、韓土を経て支那の文化が輸入され、従つて漢籍の輸入されたことは信すべきものとしても、阿直岐や王仁の傳説通りの事實は無かつたものであらう。もし果して然らば菟道稚郎子皇子の學力の勝れられた傳説も信用できない。翻つて朝鮮の狀況を見るに、高句麗は支那に接してゐるから文化も高く、早く小獸林王の時、三七二年に大學を建てゝゐるが、百濟には學問の發達したらしい形跡なく、かつ三國

史記には近肖古王の時、百濟には開闢以來未だ文字を以て事を記さずとあるから、それと同時に王仁といふ學者が出て來るのは頗る怪しい(3)。王仁の祖先は漢高祖と傳へられるから純百濟人でない故、百濟の文化は低くとも、王仁のやうな學者が出て來るのは不思議でないと説く人もあるが、王仁には又和邇とも書かれることから見れば決して支那人ではあるまい(4)。漢高祖の子孫といふ傳は全く偽である。従つて王仁の傳説は一層怪しくなる。

されば應神仁徳の頃に、外交上、交易上多少の漢字は使用され、又漢籍も若干は輸入されただらうが、一の學問として學ばれ、殊に儒學などを學び出したのは遙か後であらう。大化改新(六四五年に始る)以後でさへ學問で身を立てた者は多くは歸化人であつたことから考へると、純日本人が漢學を學習したのは、餘程後の事らしく、恐らく聖徳太子(第七世紀始)より餘り以前ではなからう(5)。それより二百年も前の稚郎子がたゞひ學習されたとして御學殖は決して深くはなかつたに違ひない。従つて太子の思想行動に儒學が影響したことは殆どないと思ふ。

然らば何故に三年も位を譲り、最後に自殺されたかといふと、稚郎子に即位できない事情があつたのである。仁徳天皇は御母が皇族であり、又早くから武内宿禰及び

その一族の後見があつて、その勢は天帝さへ一目を置かれるほどであつた(6)。然るに稚郎子は御母が身分低く、有力な氏族の後見が無かつたので、その御勢力は振はなかつたから、例へば彼の大友皇子と大海人皇子との御關係の如く、稚郎子は平和に即位されることが覺束なかつたのであらう。我が古代史は王位繼承毎に大抵悲劇政變を繰返してゐる。それは大てい外戚の争にもとづいてゐる。稚郎子の御自害も外戚の勢力争の犠牲となられたのである。

かう考へて來ると、儒教並びに支那思想と佛敎とはその輸入された時、多少の變動を國民思想上に與へてゐるだらうが、政變や悲劇を起すほどの大なる變動は起さなかつたと思はれる。しかし、舊思想や舊信仰と佛敎とが大差ある如く、儒敎も大きい差違を持つてゐた。故に儒教並びに一般支那文化は次第／＼に我が國民思想上に大なる變化、廻轉を惹起したのである。支那文化によつて我が國民思想が變化して行く沿革の研究は他日の事として、今は儒教と我が上古の道德思想並びに道德的風習との差異を述べて見たいと思ふのである。

註 (一)この一節は新村先生の御指導による所多し。

(二)伴信女の著、中外經緯傳卷一、比古婆衣

(三)日本書紀の記事を疑つて、いかに朝鮮最古の史籍とは言へ、書紀より四百年以上後れた三國史記を信するのは不都合のやうであるが、近肖古王の頃は年代は正確であるから、内容は確實性に富んでゐる事、かつ王の頃、高句麗には大學が出来(三七二)てゐたのに、隣の百濟に於ては王の時まで文字の記録なしと記し、且その後二百年、特に進歩の記事が見えないことなど、百濟の學問について消極的否定的に記してゐるのは、事實をまげて悪く書いたと思へない。必ず信頼しうべき古い史傳によつて書いたものであらう。

(四)津田博士「古事記及日本書紀の研究」(改版)の附録第三「百濟に關する日本書紀の記載」參照。

(五)聖德太子の頃から金石文も相當多く存し、著述も残つてゐるから、この頃から漢學が急に進歩したのである。もし舊くから、漢學が發達してゐたら、金石文も残り、著述そのものは傳はらなくとも、書名くらゐは傳はるだらうと思ふ。然るに金石文は和歌山縣伊都郡隅田八幡宮の鏡銘以外になく、書名も傳はらないやうである。太子の頃から俄に書籍が編著され金石文が續出して來るのはそれ以前さ、この頃までに漢學研究の沿革に一の著しい界線があることを示す。

(六)古事記中卷應神天皇の條にある髮長比賣の話など。

第二章 固有道德の探求

我が國古代に於てまだ儒教の影響を受けない固有の道德思想を探究するのに、古事記・日本書紀を主とすべきことは今更ことわるまでもない。しかしこれらの二書は共に儒教が傳來されて後、數百年を経て編纂されたものである。王仁の來朝傳説は前章の如く否定すべきものと考へられる。然るに一步を譲つて王仁といふ人を

傳説通り認めるとしても、その來朝は書紀より八九十年後の事と認めなければならぬとは前章に引いた津眞道の上奏文や、文最弟の上奏文で明瞭である。然らば古事記や書紀の編纂は王仁より三百四五十年後の事である。この間に佛敎の傳來あり、隋唐へ度々國使が派遣されたし、朝鮮半島で我が兵が新羅や唐の兵と戦つてゐるし、大化の改新があつたりして、盛んに支那文化が輸入された。古事記は推古天皇までの記事しかないから、盛んに支那の文化を輸入した聖德太子以後の記事はないが、日本書紀は太子以後の記事が相當分量を占めてゐる。これらの記事が深く支那文化の影響を受けてゐることは言ふまでもない。しかも書紀は漢文であるから、一層その影響が多い。しかし、國民生活がすべて支那風になつたのではないから、支那文化の影響の多い間に、尙固有の風俗が多く維持された事は書紀の記事の間に散見する。尤も編纂者が漢學に達した人々ばかりであり、史料として用ひた書紀以前の記録その他も多くは漢學に熟した人の書いたもの、しかも漢文のものが多かつたらうから、實生活にはまだ、固有の思想風俗の方が多かつたと思はれるが、書紀の記事面だけでは固有の文化は餘程少く見える。

前章で述べた如く漢學の盛んに行はれ始めたのは佛敎の渡來前後であらうと思

はれるが、それ以前にも、勿論韓土との交通が行はれ、また支那との交通もあつたから、一部の日本人には漢字漢文が用ひられた筈であるが、日本書紀や古事記編纂の史料に用ひられるやうな記録や金石文は佛敎渡來以前は餘程少なかつたであらう。日本書記には一云とか、一本云とか、一書云とか記して異説を併せ採録してゐるけれども、これらは神代紀から、ずつと後世まであるが、後の部分には記載してある年時に近い頃に編纂した古書もあらうが、寧ろずつと後のものが多いかも知れない。まして更に古代に溯れば、尙更たよるべき古い史料は無かつたであらうから、すべて後世へ傳つた傳説によつて編纂したものである。

履中天皇の御代は佛敎渡來の時より一世紀ほど昔である。書紀によれば天皇の四年に、始之於諸國置國史記言事達四方志とあるが、果してどこまで信じべきであらうか。抑も當時は國といふ語がどこまで正確に用ひられたか、頗る曖昧であつて、遙か後世なる奈良時代でさへ、大和の國の中で、初瀬の國と言つたり、吉野の國と言つたり、播磨の國の中で、印南國原と言つたりする位で、まして、交通も政治も進まない古代に國といふ行政區劃が明確に立てられたとは思はれない。(一)よし又國といふ區劃がほゞ定つてゐたとしても、多くの國々に一度に史官を置きうるためには多くの

史官を養成しなければならぬ。多くの史官を養成する爲には教學が餘程進んでおなければならぬ。しかし教學がそれほど進んで居たとは思はれないから、右の記事は疑ふべきものである。新羅や百濟でさへ、教學の上では非常に遅れてゐるから、文化の上では羅濟二國よりも後進國たる日本は、抽象的な精神文化では、必ず二國より遅れてゐたに違ひない。履中天皇頃は神功皇后を去ると半世紀であつて、確に漢字は一部の社會に行はれたに違ひないが、精神文化が發達してゐないから、書紀編纂の頃まで傳つて史料として使はれる程な記録などは殆ど作られなかつたであらう。朝鮮との交通、支那との交通は支那の史籍によつて、神功皇后以前三百年ほど溯りうるけれども、古く溯る程我が精神文化には大した影響を残してゐないと思はれる。

かく考へると古事記や日本書紀編纂の史料は九分までさう古いものはなく、殆どすべてが漢學の盛んになつてから、出來たものゝみに違ひない。従つて古い時代に掛けてある記事、即ち神代紀の記事やそれに續く古代の記事は古くから言ひ傳へられたのが、漢學の盛んになつた頃より記録され始めたか、或は漢學の盛んになつた頃に新しく作られたものである。古くから言ひ傳へられたものでも、口から耳へ言ひ續ける中に、年と共に變形するのは當然であつて、漸く、傳説が固定したのは、記録

された時からである。記録された時以後も傳説が變形することは言ふまでもないが、記録によつて一先づ固定する。古いものが固定するにしても、新しく作られるにしても、共に漢學が盛んになりかけてから記録されたとすれば、さうして記録者が漢學に多少なりとも素養を持つとすれば、傳説そのものには支那文化の影響が無かつたとしても、支那の學者が表現した文章を意識的に無意識的に模倣し、或は利用して記録するから、我々に傳へられた傳説は國學者の所謂漢意を含んだものとなつてしまふ。まして始から、漢意を含んだものなら、尙更然りである。神功皇后が新羅を征伐された時の記事に、「遂入其國中封重寶府庫、收圖籍文書」とあるのは、恐らく、史記高祖本紀の漢の元年の節の「乃封秦重寶財物府庫」といふ句と、蕭何世家の「收秦丞相御史、律令圖書藏之」といふ句とを續け合したものであらう。人によると、語句は史記から借りても、もとくかゝる事實があつたから、漢文に出典ある文句を使ひたがる習慣に従つて、書紀編者が史記から借りたのであると言ふ人もあるが、併しかゝる考は阿直岐王仁の來朝を儒學傳來の始とする傳説とも矛盾する考であるから、勿論、書紀の記事は文飾に過ぎないのである。されば此の記事を本として、神功皇后の頃に漢學が行はれ、皇后も典籍を學ばれたものであらうと想像することは無理である。顯宗天

皇の二年の條に「是時天下安平、民無徭役、歲比登稔、百姓殷富、稻斛銀錢一文、馬被野」とある。銀錢の通行に關する記事も同様に考察さるべきものであらう(2)。

殊に記紀等の古典について重要な問題は、これら古典に於て、古い時代に掛けてある事が必ずしも古い時からある傳説とは言へないことである。ある事實を神代に掛けてあつても、かゝる事がごく古代にあつたとは言へない。殊に民間説話や、歌謠等は傳説を採録した時に、或は古典編纂の時に、記者が考へて、良からうと想ふ所へ挿入したので古典によつて挿入時代が大變違つてくる。例へば

君が行きけながくなりぬ山多豆の迎を行かむ待つには待たじ

といふ歌は古事記では、安康天皇の御代に衣通姫の歌はれたものとなつてゐるが、萬葉集卷二では、仁徳天皇の皇后磐之媛の御作となつてゐる。又古事記には神代の卷に、大國主命(八千矛命)が沼河比賣に對して歌はれた

八千矛の 神の命は

八洲國 妻求ぎかねて

遠々し 越の國に

賢し女を 有りと聞かして

麗し女を 有りど聞こして

よ結婚に 在り立たし云々

の長歌及び返歌が、日本書紀では繼體天皇の御代に勾大兄皇子が、春日皇女を親聘して歌はれた長歌及び皇女の返歌された長歌となつてゐる。勿論少し語句に變化はあるが、歌ひ始は次のやうである。

八洲國 妻求ぎかねて

はるびの 春日の國に

麗し女を 在りど聞きて

宣し女を 在りど聞きて云々

となつてゐる。八洲國といふ言葉は日本の國が一の勢力に統一され、日本の國は多くの島々から成立してゐることが知られた後に出來た言葉に違、ないから、とてもそんなに古い言葉ではない。又八千矛命自ら八千矛命云々と歌はれるのも普通ではない。勾大兄皇子の作と傳へる歌の方が格調もよく整ひ、意味もよく通るから、この方が原作(勾大兄皇子や春日皇女が眞の作者かどうかは別として)に近く、大國主命の詠といふ方は、八千矛命の沼河比賣の許に通はれた傳説中に挿入する爲に右原作

を改めたものであらう。記紀の中に採録してある歌には比較的古い調子の歌が新しい時代に置かれ、新しい調子のものが古い時代にあつたり、又書紀の紀年で千年以上も経た間に殆ど和歌に進歩の跡が見えないのも、傳説の整理された頃又はその後の人、或は紀記の編者が當時の歌を歌意と似た傳説の所へ挿入したからである。

歌以外の例をとると、新羅の王子だと言はれる天日槍あめのひさぎの歸化した年代が日本書紀では垂仁天皇の御代の事となつてゐるが、播磨風土記では神代の事となつてゐる。垂仁天皇の御代と定めたのは、新羅の開國年代が我が崇神天皇の御代に當るので、日槍は新羅の王子と言はれてゐるから、その歸化を崇神天皇より一代さげて、天皇の子垂仁天皇の御代と記録したのであつて、恐らく書紀編者の所業であらう。しかし垂仁天皇御一代中に日槍の曾孫たごま田道間守たぢまもりが常世に使用してゐるのであるから、編者は傳説上に却て大きい破綻をこしらへてしまつた。けれども神代とすれば、新羅の開國以前に來朝したことゝなる。新羅建國以前から新羅人はあつた筈であるが、王子の居る筈がない(3)。

かゝる性質を有する書紀や古事記中の記事を正面から其のまゝ使つて、固有の思

想や道徳を論ずることは無理である。王仁來朝以前の記事であるから、支那思想を含まないと言はれない。例へば伊弉諾尊と伊弉冊尊とが天御柱を廻つて、女神がまづ「あな美し好少男」と呼び、次に男神が「あな美し好少女」と言つて、御子を生まれたら不具が生れたので、次に天御柱を廻り改めて、男神がまづ呼掛け、次に女神が呼掛けて御子を生れたら良い御子が生れたといふ傳説がある。これを本として、我が國には太古から、夫唱婦隨の道があつたと論ずるのは誤である。我が國ではどう考へても夫唱婦隨の道が太古からあつたのではない。その詳細は後の章に説く機會があるから、それに譲るが、例へば仲哀天皇と神功皇后の御間でも分るやうに、熊襲征伐の時仲哀天皇は熊襲のみを討たうとして神の怒にふれ、皇后は熊襲叛亂の策源地たる新羅を先に討つて神の冥助を得られたといふ傳説は夫唱婦隨の逆を示してゐる。さうして夫唱婦隨の例は前にあげたのが孤立して一つだけあるのに、反し、夫婦同權又は婦權の方が大きいことを示す例の方がずつと多い。

右は分りやすい例であるが、或傳説の中に支那の影響が入つてゐるか否かは、常にしかく明晰に分るものではない。と言つても支那の傳説と類似のものがあるから、直ちに支那文化の影響とは言へぬ。偶然の類似もあらうし、又歴史以前悠久な昔に、

我が日本人の祖先(それも一民族でなく數民族であつたかも知れない)が、恐らく他の國土に居た頃に得た傳説と同じ傳説が別の道を通つて支那にも移されて、一致するやうになつたかも知れない。例へば日本書紀の卷頭に天地開闢のこゝを記した文句は次のやうであるが、

古、天地未割、陰陽不分、渾沌如鷄子、溟滓而含牙、及其清陽者薄靡而爲天、重濁者淹滯而爲地、精妙之合搏、易、重濁之凝竭、難。故天先成、而地後定。然後神聖生其中焉。

これは明かに支那の古書から綴り合はした文句であつて、鷄子の譬は三五曆記にあり、清陽者薄靡以下の文句は淮南子天文訓と酷似してゐる。しかし文句が漢籍から借用した故に、内容まで支那のものであるとするのは輕卒である。さうであるか否かは再往吟味して見なければならぬ。この文句通りの思想又は此れに似た思想が、我が國に支那の影響を受けずに獨立に存したとは考へられぬ。しかし天地初成の事は書紀に列記してある六つの異書にも、古事記の中にも皆精粗の別はあれ、少しづつ述べてゐる。たゞ書記の本文ほどに詳しくないだけである。して見ると、書記の本文の説は編者或はその材料を提供した傳説の記録者が文飾した結果生れた支那的のものであるとしても、他の異説も皆ひとしく、この本文の如く天地初成の事を

述べてゐるのであるから天地初成について古代の日本人が未熟ながら何か考へてゐたことは疑が無からう。恐らく書紀の編者や傳説の記録者だけが考へたのではあるまい。かく古代の日本人が天地の始について考へてゐたとすると、それは支那思想から啓發されたのか、或は支那から獨立に考へたのか、問題である。さて天地が分れてその中に生れ出た神々の名を書紀にもその異説にも古事記にも載せてあるが、皆理窟から考へてつけた理論くさい名稱であるから、天地開闢の説は民間説話ではなく、多少知識ある者が理論的に考へた事に違ひないが、さればさて、この理由だけで支那思想の影響だと決するわけにも行かない。或は日本人が獨立に考へてゐたかも知れない。それとも悠遠なる昔にもつと他の國土に居つた時一部の祖先が支那以外の文化系統の思想を直接か間接かに受繼いだことがあつて、天地開闢について考へる事を授かつたことがあつたかも知れない。しかし書紀の本文や異説や古事記に載せてある天地初成の説はすべて支那思想の十分に輸入されて後に書上げられたものである故、大なり小なり、それ〴〵皆漢意を含んでゐる。

書紀も古事記も共に古傳を傳へようとしたものに違ひないが、その古傳がすべて漢意を含んでゐるのであるから、支那の影響を全く受けぬ、或は影響の殆ど無い固有

の道德や思想と、支那の思想とを區別することは困難な仕事である。困難ではあるが、この區別を明らかにせずして古代の道德や思想を論究することは出来ないのであるから、そこに何らかの方策を工夫しなければならぬ。

私は多くの傳説を固有のもの並に固有に近いものと、支那傳來のもの並に支那の影響を多く受けて出來たものとの區別することに骨を折るよりも、古い國語及び、中世以後まで残つた國語にしても後世の用法と違つた古い用法を集めて見て、それによつて君臣關係や親子關係夫婦關係兄弟關係などを調べて、これら人倫上に現れた道德的風習及び思想を考察して見ようと思ふ。もとより言語は絶えず變遷するものであるから、古語と言へども、何等かの變遷を経て古語に到着したのであるから、我々の有する文献に記された古語になるまでに、既に外國の影響がないとは言へぬ。さうして外國の中へ支那をも加ふべきであらう。然らば、かゝる言語を基礎として研究した結果は純日本のでないと言へるであらうが、支那の影響は古い時代に溯るほど少い筈であるから、漢學が漸く盛行した佛敎渡來以後に残された古語並びに中世以後にも用ひられた普通の語にしても、その古い用法によつて支那思想の影響の少い古代の思想や道德を探りうると思ふのである。況んや、漢學の盛行しない以前

に既に古語の中に支那の影響があるとしても、當時の日本人が古代支那人と交通したり貿易したりして、物質的文化には恐らく少なからぬ影響を受けたに違ひないが、精神的文化の上には恐らくあまり多くの影響を残してゐないであらうから、思想や道德の研究上には、障害が少いと思はれる。漢學の盛んになり出してから以後に記録されて、所謂漢意の多く加つた古傳説を材料として研究するよりは、確に支那影響を大部分除外しうるのである。

かうして研究できたものを基礎として古傳説を注意ぶかく解剖して行けば、古代日本人の道德思想並に道德的風習の僞らぬ真相を(よしや全部でなくとも)探究しうるに信ずるのである。

註 (一)萬葉集卷一「香具山と耳無山と逢ひし時立ちて見に來し印南國原」。同卷「八咫し、我が大岩の、聞こしをす天の下に、國はしも澤にあれども、山川の清き河内と、御心を吉野の國の云々」。この歌では吉野の國を天の下の國々と同じ水平線に置いて歌つてゐる。後に元正天皇の時大和の國より離して吉野監といふ一行政區劃を置いたことばあるが、この歌は持統天皇の時、柿本人麿の作であるから、勿論吉野監のない時である。同卷五「こもりくの初瀬の國に、さよばひに、あがくれば、たなぐもり雪は降り來ぬ云々」。上古の國造の支配した國は後世の國と違つて、境界の定つた行政區域でなく國造の勢力の及ぶ範圍を一區域として支配してゐたので、國には大小の差が極端にある。又どの國造にも朝廷にも屬しない原野山林が恐らく多かつたやうである。初瀬の國さか印南の國さか印國は國造に關係はないが、唯區域さか意味である。クニの語源は必ず耶の支那音から來たものであらう。大化の改新以後の行政區域としての國は、このクニの原義を轉じたものであつたと思はれる。

(二)顯宗紀二年の文は後漢書明帝紀永平二年の條に、「是歲天下安平、人無僞役。歲比登稔、百姓殷富、粟解三十、牛羊被野」とある文を用ひたものだと言はれてゐる。

(三)新羅も古い所の紀年は信用できないが、三國史記には西紀五七年の開國を傳へられ、我が書紀紀年の六〇四、崇神天皇の四十二年に當つてゐる。(大正十四年八月、以下次號)

附 明治維新以前の平民教育の機關として、最も重要な働をした寺子屋(及び私塾)の研究は今日はまだ十分に出来てゐません

ところがその研究資料は現在、日に／＼散佚してゐる有様ですから、今の中に資料を集めておかないと、後になれば、とても研究を全うすることが出来ないかも知れません。しかし何しろ民間の私設の事業ですから、世に公にされた資料は少く、世に公にされない材料が非常に多からうと思はれます。それ故皆様の御援助を仰いで、出来るだけ廣く集めて、まとめて見たいと存じます。

一、寺子屋(及び私塾)の經營者、教師の日誌、記録、文章墓碑など。

二、寺子屋(及び私塾)の教育を受けた人の追想記、自傳、師匠との往復の手紙など。

三、寺子屋(及び私塾)に於て用ひられた特殊の教科書、教具など。現存せる建物の寫眞、説明圖など。

四、寺子屋(及び私塾)の教育の實狀を寫した繪畫、その模寫、寫眞など。

五、その他、何によらず、どんな断片的なものでも寺子屋(及び私塾)に關する資料。

右御不用の方、又は現在御入用でない方は適當の期間お貸し下さいますか、又は相當の價格にてお譲り下さるやうお願ひ致します。

六、寺子屋(及び私塾)の經營者、教育者の生存してゐられるか、又はその遺族にして種々の資料を有し、もしくは種々の材料を記憶して居られるか、或は寺子屋(及び私塾)に於て教育を受けた方の生存して居られる場合。

これらの人々より直接にお話を承つて益なうけたいと存じますから、人々を御承知の方は御紹介を賜りたく存じます。

大正十三年九月

高 橋 俊 乘

京都市蘇屋町丸太町下ル